

スキー場でもある。昭和五年の津軽鉄道（五所川原―金木間）
開通により発展されたといわれる。

大正十一年嘉瀬小学校卒業生―木村米吉先生は母校の思い出
と題して、旧四月八日、清久溜池吹き上げてくる春風に頬を紅
潮させて、太鼓のドンを合図に一廻り二廻り走り、父兄と共に
楽しんだ。

その後、今のスキー場の上にトラックをつくり、ここでの運
動会は眺めもよく、実に素晴らしいものだった。

勤務当時の思い出―木村先生

体育行事での特色は、兎狩りである。稲刈りも終わり、山々
も紅葉しかけてくると、その時期になるのである。先生方が職
員室の窓をあけて、いい天気だと盛んに天気をほめる。

これは、校長に対して兎狩りはどうか？の暗示なのである。
そこは校長も心得たもの、よし、授業は二時で終わり、三時間
目から山に行くから直ぐ準備にかかれ、とくる。

スキー場の東側が、その場所なのである。一、二、三年は道
路上に、四、五、六年は北側の山上に配置され、高等科一、二
年の男は手に手に棒を持って、草むらをたたいて歩く。すると、
それこそ「だつと」の如く飛び出した兎に、全山ワットあが
る歓声。驚いた兎はゴロゴロ下においてくる。

そこをすかさず棒でたたいてしとめるのである。秋晴れの山
で、新鮮な空気を胸一杯吸い込み、兎を山に追う、これ以上の

健康法があるであろうか。

スキー場の開設と大会―木村先生

土台づくりは、当時村長だった山中礼一氏であった。スキー
十台を役場に備付け、愛好者に貸して始めたのが昭和五年の津
鉄開通の時だった。

その後は、鳴海民之助氏がスキー倶楽部を結成し会長となり、
ヒュッテ作りから、ジャンプ台（設計者は吉岡竜太郎）作りと、
自分から人夫と一緒にモッコをかつき、斜度がゆるいので、岩
石のように固い黄土を唐鍬でけずる等、手に豆し、額に汗して、
どうやら二十七・八米の台になったが、下の道路から田んぼへ
降りる所が段になって、逆斜面まで行くには相当雪が降らない
と、使えない状態だったが、この台で練習した神島安徳（明大
オリンピック候補）選手や、現在プロスキーヤーで鳴らしてい
る三浦雄一郎氏等幾多の有名選手を育てたのである。

県大会、県下高校選手権大会と大がかりなものから、西北学
童大会と脚光をあび、県のお偉方もおしのびでこっそり滑りに
来るほどになり多忙を極めた。

スキー選手はあまり強いので、折角他校から来ても嘉瀬には
とてもかなわないと参加者が減るようになったので、選手に練
習するなと言った位だ。それでも選手は、どの雪には、どのワッ
クスと覚えてしまい、技術面も抜群で、二流三流でも立派にた
ち打ち出来る程に層が厚くなり、スキー学校と言われる程になっ

た。それもその筈、学校常備のスキーが五十台あり、体操の時
間がスキー教室に早変わり、雪を楽しむ様は壮観だった。（な
お、その後、第十七回冬季オリンピック大会、第十八回冬季オ
リンピック大会と日本代表選手、喜良市生まれの古川純一選手
は金木町に育っている。）

右の項は、嘉瀬生まれ木村米吉先生の嘉小百年史への寄稿で
ある。

観音山の頂上に登るには三つの登り道がある。車の舗装路と、
神社参拝への道、三十三観音巡りの道、又奥山へ行く車道はス
キー場の南側の沢を埋めて造ったものと故人の村人から聞か
され昔の杣人は中柏木に行く道を通り現在の建設土取り場となっ
た林道を通って今の車道（昔は林道）に上ったと述べている。

私達が小学校の時には、山に遠足に行くとき先生は先生の目を
かすめては、この旧林道を通り先回りして教室に帰っていた。

神社参拝への道は、住宅地前の車道の北側の鳥居をくぐると
山の神社、薬師神社、大工の神、太師神社あり、俳句会のき
ぬたの小道へと続き山の頂上の忠魂堂及観音堂へとたどり着く。
昔は神社近くは芝が一面に生え車道に向かってゴロゴロ転ん
だり、尻を付けて滑り降りて遊び廻ったりした。

三十三観音像 昭和八年建立、建立者三百二名。

（観音信仰は鎌倉時代に始まり、江戸中期から、津軽でも隆盛
をきわめ、津軽三十三観音ができたといわれる。第二集かたり
べに津軽観音個々の住所等も詳しく書かれている。）

嘉瀬三十三観音巡りの道は一番手前にあり、半世紀前には車
道の北側下の小池の辺りに降り竜神様の祠の下から湧き出る名
水を口に含み手を浄め三十三観音巡りの道へと歩んだのである。
この名水こそ原田酒造店が寒入の酒仕込みの期日となると名
水を馬桶で運んで仕込まれた酒は、嘉瀬観音正宗の銘酒で県下
に名を売っていた。

縄文前期（西暦前二百年頃）の土器が県教育文化課によって
観音石仏のある斜面より出土されているといわれる。縄文人、
弥生人、アイヌ人等の原住民も竜神の地下の湧水を飲み続けて
こられたのだろう。しかし住宅も建ち、町水道が掘られて現在
は湧水も止まり、杣人等の往復には必ず小池の竜神の祠に降り
冷水を飲み一ぶくした跡形もなく小池には葦が生えて、昔のお
もかげは消えた。

現在はお地藏さんも車道の近くにあり、駐車場も造られ、散
歩や山菜取り、三十三観音巡り等の人々には大分と便利になっ
た。

私もその駐車場に車を置き、三十三観音巡りをする。一番観
音菩薩の背には計四人の名が刻まれている。その一人鳴海忠司
氏は嘉瀬小学校の先生をされ、生徒に赤ひげ先生とあだ名を付
けられていた村二番の財産家でもあった。

二番観音菩薩計十五名の内、土岐繁美氏、沢田沢一氏は大
工、花田正義氏は製材所を本町で経営され、金木町役場の収入
役を勤めた方である。

三番観音菩薩Ⅱ計一名、派立の中村佐市氏農業。四番観音菩薩Ⅱ十七名の内、木村米吉先生は嘉瀬生まれで、嘉瀬小学校に在職された後に青森県立青森工業高等学校を定年退職され、現在は青森市松森字佃一四三に在住中とされる。

五番観音菩薩Ⅱ計五名の内、畑中の秋元亀吉氏柵割業。古町の木村峰五郎氏は村の催しごとに三味線を弾き、笛を吹く名物男であった。

六番観音菩薩Ⅱ計二十一名、七番観音菩薩Ⅱ計五名は長富部落の方々。七番観音菩薩Ⅱ計十名の内古町の鳴海勲氏は奴踊りの元祖、鳴海惣五郎氏、鳴海大次郎氏は柵割業です。

八番観音菩薩Ⅱ計二名。九番観音菩薩Ⅱ計五名の内、畑中の土岐繁一氏は、奴橋近くの馬蹄製鉄所のご主人、当時は嘉瀬村に何百頭かの馬がいて、四軒の馬蹄製鉄所があり、役場に馬の戸籍（本籍、生年月日名称、何号を記した公文書）あり、売買のさいは戸籍も必要とされた。

十番観音菩薩Ⅱ計二十名。十一番観音菩薩Ⅱ計十七名の内、派立の原田勇太は村会議員、土岐正蔵大工、今常五郎馬での運搬業、浜田由雄も運搬業、飯塚力雄も運搬業。

十二番観音菩薩Ⅱ計一名。本町の鳴海民之助氏、嘉瀬小学校歴代五番目校長先生大正九年四月、昭和十四年九月二十六年間の長きにわたり勤める。

十三番観音菩薩Ⅱ計十三名の内、鍛町の原田男茶氏農業、秋元惣五郎氏農業。十四番観音菩薩Ⅱ計五名。

計七名の内、蛸島寅次郎氏。

三十三番観音菩薩Ⅱ計の内、鳴海善八氏、村会議員及び本町の熱の湯のご主人。（観音様石像の建立者数三百二十名）

右建立者は明治、大正初期の生まれであり、殆ど故人とならされている。この三十三観音巡りの道を歩むおりに観音菩薩の背を覗くとそこには、懐かしい故人の名が刻まれてあり、半世紀前に巡り合ったままの（故人、私）二人の姿である。

鳴海校長先生に連れられてこの道を登り山の昆虫、ヤンマトンボ、美しいチョウ、大きなトノサマバッタ等に驚き山の景観に接し、最初に山の素晴らしさを知った観音様である。

三十三観音巡りの道を登りきると観音堂にたどり着き、周囲には、殉難警察官吏之碑、

石碑の裏側に『故青森県巡查、千葉徳太郎、明治三十五年九月五日殉難、大正十三年九月五日建立、発起人、金木警察分署、嘉瀬消防組』嘉瀬駐在所勤務。

大東亜戦争の痕跡

山中弘、尋常高等小学校を卒業され、少年飛行兵に志願され、特攻機に乗り南の空に散った若者である。

齊藤亀八、観音山の縁日には、三人抜きに相撲に勝抜く豪の者で会ったが、昭和二十年常夏の国、レイテ島カンギボット山の激戦にて戦死されている。

沢田常雄、昭和十一年嘉瀬尋常高等小学校卒業、海軍に志願

十五番観音菩薩Ⅱ計一名中柏木、原田茂次郎氏。十五番観音菩薩Ⅱ計二十名の内、小栗崎の松川松右エ門氏、運搬業。

十六番観音菩薩Ⅱ計六名の内、冷水の沢田勇三郎氏農業、小山内男治氏農業、農協理事。十七番観音菩薩Ⅱ計二名の内、本町の高杉宇八郎氏本町にて呉服店経営者。十八番観音菩薩Ⅱ計五名の内、秋村米作農業、齊藤千代吉氏鍛町下駄やご主人。

十九番観音菩薩Ⅱ計十九名の内、昭和町の今豊五郎氏、金沢岩五郎氏、秋元虎次郎氏、二十番観音菩薩Ⅱ計六名の内、畑中の鳴海角左門氏農業、鳴海善七郎氏畑中にて鞍造店のご主人。

二十一番観音菩薩Ⅱ計四名。二十二番観音菩薩Ⅱ計七名の内、本町の工藤林蔵氏本町にて魚及呉服店経営、冷水の山中徳三郎氏農業。

二十三番観音菩薩Ⅱ計七名、冷水の花田甚作氏農業。二十四番観音菩薩Ⅱ計五名の内、工藤きよ。二十五番観音菩薩Ⅱ計三名、木村担道妻、今兵四郎妻、齊藤重五郎妻。長富。

二十五番観音菩薩Ⅱ計十一名の内、齊藤定五郎妻・稲垣、岩井茶一郎妻。二十六番観音菩薩Ⅱ計五名の内、平川由八氏農業。

二十八番観音菩薩Ⅱ計七名の内、齊藤由八氏、畑中、農業、齊藤直衛氏本町にてそば屋ご主人。

二十九番観音菩薩Ⅱ計四名の内、伊藤吉二。三十番観音菩薩Ⅱ計十六名の内、前町、木立間五郎氏、村会議員。三十一番観音菩薩Ⅱ計八名の内、蛸島繁太郎氏農業。三十二番観音菩薩Ⅱ

されて、マリアナ諸島方面海上にて戦死。

山中武四郎、私の少年時代に指導的立場にあり、村のために尽くした意思の強い人であったが、零下四十度近くなる朝は寒気で身体も痛くなり、静寂の朝は鳥も獣の鳴き声も絶えるといわれるシベリア「チタ」地区ダラスン収容所にて（妻子ある身）にて戦病死されている。

私の肉親の兄もレイテ島シラットにて戦死され、五所川原市の龍泉寺に父と二人で兄の遺骨箱を受け取り、わたしは津鉄の汽車に乗る、胸に抱いた遺骨を下ろし窓際の席に置く汽車はガタンガタンと発車する。

日本晴れである、青田の上を微風が西より流れ、窓から入り、遺骨箱に注ぐ、私は遺骨箱を窓の方に向ける。

六年振りの無言の帰国の兄に、古里だよと心で告げた。徴兵として「中国」北支派遣軍に加わり約三年間の戦い、南方方面の戦局が絶望的となった昭和十九年フィリピンへ派遣され、昭和二十年レイテ島にて玉砕、戦死した兄だった。

ふっと前の席の父を見ると外の風景を眺めて心は静かなようである。後日骨箱を動かすたびにカタ、コトと音がする。父と二人で蓋を開け中を見ると納まっていた品は〇〇〇之霊と書かれた小さな白木の位牌だった。

旧嘉瀬村地区、大東亜戦争の戦没者、百二名（嘉瀬忠魂碑に依る）の内、本物の骨箱となって帰れたの方は何人あったであろう。

数千里の離れた異国の山河や空海で屍となって半世紀を過ぎ去っている戦没者のご冥福をお祈り申し上げる。

此の戦没者達も嘉瀬観音様の縁日の夜、踊りに参加され、昼は相撲に歌の大会と参加されている。又、近隣の村々の人々も集う、賑わった祭りであった。

平成十三年二月に工藤清治氏、ふるさとを探る会代表山中正津氏、RABより伊奈かつぺい、中央の芸人内海佳子、及び司会者の五人の対談は、観音堂に安置の桃地蔵、山中利一地蔵及び小山内嘉七郎『漫遊』氏に関することである。数年前には、直木賞作家「主人公は桃津軽よされ節」長部日出雄氏も訪れている。

小山内漫遊仙人は唄い手としては、桃を理想とされ、桃発声の練習場とされたこの観音山で漫遊自身も唄の発声の練習、又、他県の民謡もマスターされて、全国を唄い歩かれて、広島及び熊本放送局で、大正十五年に民謡をラジオ放送されたそうである。

軍の慰問で大陸に渡り、唄いあるき、その名も本名よりも漫遊の方が知れ渡ることになったといわれる。思想的には日本右翼の首領頭山満の右腕として活躍、北一輝、大川周明氏等と交遊あり。大正十二年の関東大震災の時、無政府主義者大杉栄の葬儀場に入り込み、ピストルをかざしてその遺骨を奪った首謀者とされる。又、民選初代知事の津島文治、及び竹内知事とも親交の深い方である。(御子息はRABの山中達一氏) 四十四

小山内漫遊伝記については、第三集のかたりべー山中正津氏、第四集、小山内嘉一郎氏、第八集及び第十集、木立民五郎氏等により著しているのが、是非お読み頂きたい。

嘉瀬観音山からの遠景は、車の道程は約四十二キロの地点に日本海に突き出た、二百二十九メートルの断崖絶壁、二千二百年前中国の秦の時代に不老不死の仙薬を求めて、徐福上陸伝説もある観光の名勝地の権現崎の岬が眺まれ、西遠景に連なる砂丘には、古代の多くの跡が残っている。現在の十三湖も十三瀨、十三湊、と近年まで三通りに称ばれていた。

古代瀨時代には嘉瀬観音山に連なる小栗崎、端山崎等は漣の押し寄せる地帯ともいわれ、対岸の西の屏風山(砂丘)、縄文後期の遮光器土偶は代表的遺跡であり、又、日本海岸の七里長浜には、最近有名になった、埋没林及び火山灰が平成一二年に報じられている。七里長浜の出来島北方、泥炭層には、九州南部、鹿児島湾の北端にある始良(あいら)カルデラの巨大噴火によってもたらされた火山灰が挟まっている。「始良TN火山灰」は埋没林の少し上を見ると、細く白い筋がはつきりと見えるといわれている。

約二万七千年前、日本列島全域を襲ったこの巨大噴火は、九州の生態系を壊滅的なものにし、本州でも森林の変化を一気に促進した。針葉樹林だった屏風山や津軽一帯では、湿原は乾燥し、二次的な低木類がはびこった。

旧石器時代の人々の生活に大きな影響を及ぼしたに違いない。

才の若さで死去した、将来の大人物と目された山中利一氏とは、右翼同志である。酒を酌み交わし、よく観音山に遊びし日を(小学校は同級生でもある)二人はよく語り合ったとされる。私が漫遊を見たのは、敗戦の後である。法華宗の輪太鼓に似た太鼓を持ち、白衣をまとい、髪は胸までたれて、首には大きい数珠をかけて、太鼓を叩き、

嘉瀬の桃だば 女郎買い好きだ

それは冗談だ、酒ばかり好きだ

それも冗談だ ボダモヂ好きだ

唄の好きな漫遊は村を歩いては唄い、観音堂を住み家としても唄っていた。

当時は天皇制に付いても村人を劇場に集い、天皇制擁護を吉崎正光氏(共産主義者となる前)等と共にうったえている。

観音堂に恩師の山中利一地蔵と棟方志功画伯の絵を下絵にされたといわれる桃地蔵との二体の像が安置され、供養されるようになると、太鼓を法螺貝に替えて修験者となって、嘉瀬観音堂を拠点として、八甲田山の鹿内仙人棟方志功画伯、自らも小山内仙人と称し、三人は酸ヶ湯温泉で夜の更けるまで、語り合ったといわれる。

聖地とされる下前の権現崎、岩木山赤倉沢と、行ない励むこと数度、年老いては日夜、二体の地蔵を供養され、八十二才昭和五十三年三月、村里はなれた、そこつな観音堂の地蔵の前で誰にも看取られず冥土に旅立ったのである。

もう一つ巨大噴火の産物がある。現在の池沼下の地層や新しい砂丘砂の中、必ずといっていいほど見受けられるのが、朝鮮半島の付け根の白頭山の噴火によってもたらされた真白な火山灰である。

これは平安時代の九百二十年前後に噴火したものである。同じくバブル・ウォールの火山ガラスで、乾くとさらさらしている。この火山灰が降ったことで、屏風山の砂丘砂は突然、真つ黒な土壌に変化したのが、これをクロスナと呼んでいる。

砂丘の上に草原ができたのである。三内丸山遺跡の調査でも見つかっていて、湿原が乾燥するとともにシダが大繁殖したことが分かっている。自分の周囲だけを見てみると、全く関係なさそうなものが、実は大きな存在だったということがある。

屏風山の自然には、まだまだそんなものが隠されているに違いない。

七里長浜と屏風山が大切なのは、そこから世界が見えてくるからである。

中世から戦国末期にかけて日本を代表する有力な七湊とは、越前三国・加賀本吉・能登輪島・越中岩瀬・越後今町・出羽酒田・(土崎湊)陸奥津軽十三湊である。

平安時代の西一〇五一年、前九年の役で源頼義に滅ぼされた安倍貞任の子孫であるといわれる。安東氏は安藤氏とも称されていたともいわれる。安東水軍の十三湊はしばらく栄えて鎌倉期及室町期には北日本海の王者として安東水軍は朝鮮半島、中

国大陸にまでも航海し、二度にわたる元寇の乱に参戦したといわれている。

鎌倉末期西一三二一〜一七七年には福島城を築城し、室町時代には日本の本將軍とも呼ばれたといわれている。

江上波夫博士が昭和30年に行った発掘調査では、城址の規模は二万五千平方メートルもあり、東北地方最大のスケールだった。本拠地十三湊も発展し、立派な神社社殿が立ち並び、港湾施設も整備されていた。近年、市街地の本格的な発掘調査が行われた結果、大量の中国製の青白磁などが出土し、町並みと結びついた大きな屋敷跡も発見された。安東氏の屋敷跡と思われる。

鎌倉室町期に絶頂を迎えた安東氏だが、西一三四一年、南北朝時代の二回に渡る日本海大津波による十三湊壊滅（西一六〇〇年・慶長五年及び西一六三八年・寛永十五年の岩木山噴火があり、灰の降ること夜のごとし）十五世紀中葉、南部氏の攻勢あり、長享四年（西一四三二年）には津軽藩に攻め込まれ福島城は落城、海の王者も背後からの陸戦に破れたといわれる。

その後十三湊は津軽の物資の運搬船の往来はあったが、昔の面影はなく現在の湖は狭くなり十三湖と呼ばれている。

観音山からの近景は日本三大美林と称されたあすなる（檜）の樹木地帯（あすなるの成長は四寸角の丸太となるのに二百年を要する。一尺五寸〜二尺の架物材の丸太は三百〜四百年を要

であらう。

七十年の風雪に耐え忍び咲いている桜は観音山の坂まで十本だけ残って疎である。桜並木として植えた当時、子供ながら見ている私にとってはあまりにも少なすぎる数の生残りの桜並木。頂上にも十本程の桜が満開に近い状況にあり、鶯も囀っていて日本晴れである。

〜子等に残したい観音山〜

先生に引率された四十人程の小学生がスケッチにきて、中山脈に向きあう生徒、観音像の前に座する生徒もいる。きぬたの小道の句碑に行ったり、各々スケッチの場所探しに夢中である。

私が腰を掛けているベンチの傍にきてスケッチを始める小学生もいる。日本海の西の彼方よりゆっくりと流れてくる白雲と町並の風景を眺めている。

この可愛らしい小学生も私のような喜寿の老らくとなるも、今日のスケッチのことは忘れないだろう。

附表 嘉瀬村忠魂碑銘

戦没者氏名	年月日・戦病別	位階	死没・場所
山中龍夫	昭一三・四・二〇戦死	陸曹	中国山西省襄垣県城外

するそうである。）であった中山山脈、あすなるの材木を運ぶための軌道車は日本で一番最初に走ったといわれる。

喜良市・金木・大沢内・薄市・今泉等の部落の西側に面した森林鉄道は日本海の大津波の渦巻きによる、岩木川（大川）等の泥砂が巻き上った砂の地層帯に明治十二年にレールを敷き材木を青森に運んだといわれている。

鴻・湊・湖と変容された津軽平野の有様を眺め眼前には、全国に見ても貴重な発見とされる、一万三千年前の太平山元遺跡（蟹田町）の石器に並ぶとされる金木町喜良市の相野山遺跡の石器を筆頭に次々と発見されている遺跡の中に我がふる里・金木の町並みがある。

太宰治も戦時疎開中に観音山に嘉瀬の知人と訪れて生れ育った津島家のありかを探したといわれる。

戦没者及小山内漫遊他ふる里の人々―百数名の鎮魂地でもある。四季おりおりの句物を探し求める人、朝夕散歩する人、冬山にはスキーを楽しむ人、春ともなると昼休みの時間帯に車で行く憩いの人、気軽に自然を満悦できる身近な山である。

桜満開のうわさを聞いて、四月二十八日車に乗って観音山に向かつて行く途中の踏切に差し掛かると南側にある、嘉瀬駅プラットホームに一本の桜が満開で見えている。

明治生れの先輩達が、昭和一桁時代に二〜三年がかりで駅を出発点に観音山まで数多く、桜並木として植えた桜の内の一本

伊藤哲雄	昭一四・二・四	戦病	陸上	北満齊々爾陸軍病院
鳴海繁四	昭一七・六・一〇	〃	〃	中国河南省武安第一〇師団野戦病院
木下林蔵	昭一八・五・三	〃	陸伍	ソロモン群島ブーゲンビル島
原田兼吉	昭一九・九・五	〃	〃	「イユウ」一〇五兵站病院
小山内初四郎	昭一九・九・五	戦死	陸兵長	濠北ケイ諸島方面
舛甚助義	昭一九・三・五	〃	陸上	スタン列島ロンボック島沖合
伊藤精八	昭一九・二・五	〃	陸兵長	呂床島リバ飛行場
平川久作	昭一九・二・六	〃	陸伍長	クエゼリン島
沢田国雄	昭一九・二・六	〃	陸兵長	マニラ昭和島間海上
沢田国平	昭一〇・四・四	〃	陸一	神奈川県崎大師原
飯塚秀男	昭一〇・四・四	〃	陸一	神奈川県崎大師原
鎌田岩男	昭一〇・二・八	〃	陸兵長	中国湖南省榔原
斉藤善七郎	昭一〇・二・八	〃	陸	朝鮮済州島西方海上
山中征男	昭一〇・七・二九	〃	陸兵長	中国湖南省寧郷県大公部
山中勝治	昭二・五・六	病死	陸軍	スンバク島ロンボク
今熊太郎	昭一九・九・一	戦病	陸兵長	ビルマ国・チイテム
成田与三郎	昭一九・四・三	戦死	陸兵長	ソロモン群島ブーゲンビル島タロキナ
原田薫雄	昭一九・一・一五	戦病	陸上	中国湖南省衡陽県
山中信高	昭一〇・五・一六	戦死	陸兵長	中国湖南省新化県巴油
棟方由之助	昭一〇・二・二九	戦病	陸兵長	中国武昌県武昌
鎌田三太郎	昭一九・七・二	戦病	陸伍	ニューギニア島サルミン
山中弘	昭一九・五・六	戦死	陸伍	ニューギニア島ソクデ

増田千代吉	昭三四・五二六	病死	陸上	北ボルネオ島にて罹病、帰郷。自宅で没
小山内松次郎	昭三三・九二五	戦病	陸軍	ソ連ケイメル洲キスローフスキ
鈴木敏信	昭二〇・二二三	戦死	陸軍	ルソン島リザール洲タンバリット
中村英雄	昭二〇・三三五	戦病	陸軍	ルソン島マウナン洲ベギ野病
三上子之太	昭二〇・二二七	戦死	陸上	比島クラーク地区
加藤勇二	昭二五・九七八	病死	陸上	北支那に従軍し病氣となり帰郷。五所川原病院で没
沢田吉松	昭二五・九二九	戦病	陸軍	中国天津市陸軍病院
齊藤善一	昭二〇・五二二	戦死	陸少尉	中国湖南省新化县黄家冲
齊藤善一	昭二二・二二二	戦病	陸曹	ソ連ハバロフスク洲ムリ地区一四四九陸病
神島安光	昭二〇・八二六	戦死	陸伍	満洲興安省海拉爾武地区陣地
山中正美	昭二〇・八二五	戦死	陸伍	満洲牡丹江省穆稜県小笠山
鳴海太郎	昭二〇・一・一五	戦病	陸伍	ルソン島マウテン洲バキオ
成田忠雄	昭二五・七五六	病死	陸兵長	ナホトカ捕虜収容所
須崎永吉	昭一九・八八九	戦死	海上水	南西諸島方面
沢田定一	昭一九・八八九	戦死	海上水	南西諸島方面
浜田常雄	昭一九・七八	戦死	海兵長	マリアナ諸島方面
鳴海金藏	昭一七・二二七	戦死	海軍属	ソロモン諸島方面
山中作次郎	昭一九・七四	戦死	海中尉	太平洋小笠原諸島方面
秋元秀雄	昭一九・八二	戦死	海上水	南太平洋メレヨン島
山中正志	昭一九・〇・三	戦病	海上水	南太平洋メレヨン島
伊藤一二三	昭一八・一〇・六	戦死	海兵長	南洋諸島方面
佐野幸次	昭一七・六七	戦死	海一水	東太平洋方面

伊藤勝衛	昭一五・八八九	病死	陸	山形陸軍病院
山中篤司	昭一〇・六六	戦死	海上曹	九州方面
三上勝見	昭一九・二二八	戦病	陸上	ソロモン諸島ブーゲンビル島
今福四郎	昭一九・二二三	戦死	海一曹	ニュギニヤ方面
秋元兼太郎	昭一〇・八二〇	戦病	陸伍	中国東滿総省拉子
飯塚長栄	昭一〇・七三〇	戦死	陸伍	ルソン島ヌエンバン洲サンミゲル
山中泉	昭一〇・六二五	戦死	陸伍	ルソン島フタムスクール
三上勝見	昭一九・二二八	戦病	陸伍	ブーゲンビル島
浜田繁八	昭一九・九一九	戦病	陸兵長	中国湖南省衡陽県
今初雄	昭三三・五二七	戦病	陸伍	中国河南省博愛県西東村
中元平内五郎	昭二〇・一〇・九	戦病	軍属	満洲吉林省林陸軍病院
八幡隆三	昭二〇・七二七	戦死	陸大尉	レイ島ピリヤ
齊藤道国	昭一八・二二四	戦病	陸兵長	ブーゲンビル島
齊藤秀雄	昭二〇・九四	戦病	陸上	朝鮮全羅南道済州島
其田長六	昭一九・六二三	戦病	陸	ブーゲンビル島スマタタ
太田定杉	昭二〇・六三〇	戦死	陸兵長	レイテ島カンギボット山
其田正一	昭二〇・六一〇	戦死	陸伍	比島セグ島北部
増田清次郎	昭二〇・三三三	戦死	海一曹	南支那漁島東洋上
其田弥士男	昭一九・二二七	戦死	海一水	南洋群島方面海上
尾野義美	昭二〇・四三三	病死	陸一	東津軽郡西平内療養所
増田末作	昭一九・二二五	戦死	陸大尉	沖繩北方洋上
其田年次郎	昭二〇・二二二	戦死	陸兵長	ルソン島リザール洲ハコノエ

鳴海龍三	昭二〇・三二四	戦死	陸軍尉	東支那海
土岐武雄	昭二〇・四二六	戦死	陸伍	沖繩本島小波洋
中村忠一	昭二〇・五二六	戦死	陸伍	比島ルソン島バレラ
鳴海恒男	昭二二・二三	戦病	陸兵長	大分県別府市国立病院
伊藤摘男	昭二二・九七	戦病	陸大尉	ソロモン群島ブーゲンビル島
山中兼雄	昭一六・六三三	戦死	陸一	中国河北省安国県鯨京
杉山清実	昭二〇・三二〇	戦死	陸兵長	比島マニラ
鎌田由一	昭一五・六二八	戦死	陸上	中国山西省沢洲泉沢洲
鎌田林之助	昭二〇・六三〇	戦死	陸伍	レイテ島カンギボット山
木村武智雄	昭二〇・六三〇	戦死	陸兵長	レイテ島カンギボット山
齊藤亀八	昭二〇・六三〇	戦死	陸伍	レイテ島カンギボット山
山中武四郎	昭二二・三二二	戦死	陸伍	シペリア「チタ」地区ダラスン収容所
木村松四郎	昭二〇・二二三	戦死	陸伍	ルソン島リザール洲タンバリット付近
山中慶藏	昭二〇・二二三	戦死	陸曹	ルソン島リザール洲タンバリット付近
杉山善助	昭二〇・六三〇	戦死	陸伍	レイテ島カンギボット山
鳴海武四郎	昭二〇・六三〇	戦死	陸兵長	レイテ島カンギボット山
原田末光	昭二〇・六三〇	戦死	陸少尉	レイテ島カンギボット山
平川久光	昭二〇・六三〇	戦死	陸兵長	レイテ島カンギボット山
三上多七郎	昭二〇・六三〇	戦死	陸伍	レイテ島カンギボット山
杉山専次郎	昭二〇・六三〇	戦死	陸兵長	レイテ島カンギボット山
鳴海進	昭二〇・六三〇	戦死	陸兵長	レイテ島カンギボット山
秋元清三郎	昭二〇・六三〇	戦死	陸伍	レイテ島カンギボット山

秋元 広	昭二〇・一三	戦死	海軍属	本邦南方海上
伊藤立男	昭二〇・二二三	戦死	陸兵長	ルソン島リザール洲ハコノエ
鎌田 薫	昭二〇・七二〇	戦死	陸兵長	レイテ島リザール洲モンタルベン
山中新一	昭二二・四一八	戦病	陸伍	シペリア・タイセット収容所
伊藤 征八	昭一九・八二九	戦死	陸伍	中国湖南省隆県附近
山中長一郎	昭二〇・三三〇	戦死	陸伍	レイテ島シラット
小松藤助	昭一九・二二九	戦死	陸伍	マーシャル群島ブラウン島
小松藤次郎	昭二〇・六三〇	戦死	陸伍	レイテ島カンギボット山
黒川清次郎	昭二〇・八二四	戦死	陸曹	朝鮮咸鏡北海羅南市
鳴海 忠	昭二〇・五三〇	戦死	陸兵長	ルソン島マニラ
木村亮信	昭二〇・八二四	戦死	陸兵長	ルソン島フランカン洲イボ
山中健治	昭二〇・二二六	戦死	海水長	比島マニラ市
工藤君吉	昭二〇・五二〇	戦死	海水長	比島クラール
伊藤正弘	昭二〇・五二〇	戦死	海上曹	ミンダナオ
鎌田君吉	昭二〇・三二七	戦死	海一曹	硫黄島
津田稔次	昭二〇・三二三	戦死	海上水	ルソン島パンガスナンリット
津田一郎	昭二〇・七二四	戦死	海上水	函館湾口
伊藤武四郎	昭二〇・二二八	戦死	海上水	西貢沖
森 栄三郎	昭二四・一〇・二四	戦病	陸上	旭川陸軍病院
齊藤勝巳	昭一五・二一九	戦病	海曹	横須賀海軍病院
齊藤俊躬	昭二〇・六三三	戦死	海一曹	比島方面
鳴海清武	昭一五・三一九	戦病	陸上	東京市牛込区戸山陸軍病院